

大和小学校

研究主題 「学び合い高め合い意欲的に学ぶ児童の育成」
副題 一言語活動を通して

研究仮説

授業において言語活動を充実すれば、一人ひとりの考えを深めることができ、学び合う学習集団としての質が高まり、意欲的に学ぶ児童が育つであろう。

I 研究の内容

1 研究の具体的内容と方法

(1) 児童の実態把握

ア学力調査 国語と算数の前年度の学習の定着を客観的テストで調査する。
イ「言葉に関するアンケート」により児童の言語に関する実態を把握する。

(2) 理論研究・学習会

ア講師を招聘しての学習会の実施
イ各種研修会への参加と環流報告

(3) 個に応じた指導の工夫

ア児童の実態に即した指導の工夫を行う。
イ「考える場」と「伝え合う場」の設定。
ウ授業研究と一人一実践の授業公開を行う。

(4) 学習環境を整える手立て工夫

ア発達段階に応じた学習規律の定着。
イ「話し方・聞き方」に関する具体的内容が書かれた教室掲示。
ウ「生活ノート」の継続。

II 研究実践

1 理論研究

(1) 学習会

ア「言語活動の充実させる手立てについて」

講師：教育事務所 指導主事 小林 俊彦 先生

2 研究授業

(1) 第1学年 生活科「はながうたうよ るんららん」

授業者 岩下 亜希子 教諭

講師：義務教育課 主幹指導主事 小林 正治 先生

アサガオの実ができてから種になるまでの様子を思い出し、世話の様子を振り返り、思ったことや、気づいたことを表現し、発表する授業を行った。言語活動を充実させるためにアサガオの観察カードをもとに成長の様子や世話の様子などを思い出しながら発言させた。また、子ども達に考えさせる場をつくり、6種類のカードに自分が書きたいことを書かせた。そして、子ども達にカードをもとに自分の考えを発表させ互いに考えを聞き合い、伝え合う場をつくって考えを深め

させた。

(2) 第5学年 理科「ふりこのきまり」 授業者 滝島 正彦 教諭

ふりこの1往復する時間は、どうすると変わるかを考え予測した。ふりこの重さや糸の長さの違う2つのふりこを見させて、どちらの方が1往復する時間が早いかを考えさせた。学習カードを用意し、子ども達にふりこが1往復する時間の条件や3つの条件が違っているとどうなるかを予測させた。発表の場としてまず、班の中で意見を出し合い、次に、全体の中で発表し合って互いの意見を聞いて考えを深めさせた。研究会では、意見を対立させることが大切ではないかという意見が出された。

3 授業実践（一人一実践）

- ・第2学年 生活科「つくってワクワクあそんでワイワイ」 武井 敏江 教諭
- ・第3学年 算数科「どんな計算になるかな」 小石澤 淳子 教諭
- ・第4学年 算数科「広さを調べよう」 青木 恵 教諭
- ・第6学年 算数科「順序よく整理して調べよう」 清水 誠治 教諭
- ・さくら学級 国語科「説明のしかたについて考えよう」 松井 仁美 教諭
- ・ひまわり学級 算数科「図形の角を調べよう」 大原 純子 教諭
- ・第3学年 理科「明かりをつけよう」 阪本 辰彦 教諭
- ・第4学年 理科「水の流れと電気の流れ」 中村 精志 校長

III 成果と課題

1 成果

- (1) 「授業において言語活動を充実すれば、一人ひとりの考えを深めることができ、学び合う学習集団としての質が高まり、意欲的に学ぶ児童が育つであろう」という仮説をもとに、話し合いの場において自分の意見を予め紙に書いたり、話し方のこつや聞き方のこつを指導することによって、意見を進んで発表して意欲的に学ぶ児童が増えてきた。
- (2) 「話し方・聞き方」について系統表を作成し各学年ごとに教室に掲示して教師が日々の実践で指導にすることで、子どもたちが少しずつ意識して学習するようになった。
- (3) 全学年で「生活ノート」に取り組み、児童の家庭生活の様子を把握することができ、児童がより良い生活習慣を確立するための手立てとなった。
- (4) 学力調査（CRT）や「言葉に関するアンケート」を実施し、児童の実態を把握することができ、どこの学習が苦手なのかなどの傾向が分かり有効であった。

2 課題

- (1) 言語活動の充実という広い内容の研究なので、まだまだ学習を深める必要がある。
- (2) 「話す・聞く」を重点的に取り組む中で、自分の考えを持ち、発表する力は少しずつついてきたが、話をしっかり聞き、考えるという点ではまだまだ課題が多い。
- (3) ブロック研究が、研究授業の指導案検討で終わってしまう感があるので、もう少しテーマを決めて取り組んだ方が良かった。また、低・高の研究を交流できる場がもっとあるとよかった。

（研究主任 武井 敏江）